知識探訪　多民族社会の横顔を読む
協力：日本マレーシア学会（JAMS）

マレーシアの音楽・ピアノ教育と資格試験

田中李歩（一橋大学社会科学高等研究院特任助教）

マレーシアのヤマハ音楽教室のレッスン室の一例。この部屋で行われる幼児科のグループレッスンを経て、生徒たちはグレード試験受験に向けた個人レッスンに進んでいく（筆者提供）

「ＡＢＲＳＭ、何級持ってる？」

大学生時代、交換留学先のオーストラリアの大学寮で毎日のようにピアノを弾いていた筆者は、音楽を副専攻にしているマレーシア人学生と親しい友人になった。冒頭の質問は彼女からのもので、筆者がＡＢＲＳＭ（英国王立音楽検定）というものの存在を知るきっかけとなったように記憶している。

あまり話題にはならないが、マレーシアでも私的な音楽教育、特にピアノ教育は以前から一部で盛んに行われており、例えば1990年代の新聞記事には海外のピアノコンクールで成果を上げた子どもたちが取り上げられている。

ただし、マレーシアのピアノ教育には日本とは異なる特徴もある。ＡＢＲＳＭやトリニティ・カレッジ音楽検定といった、楽器の演奏技術を認定する資格試験との関係の深さである。歴史的経緯から英国の音楽教育の影響が大きいこともあるが、こうした試験の受験がピアノ教育とほとんどセットになっており、ピアノ学習の大きな（時に最大の）目的となっているとも言える状況のようだ。

中でもＡＢＲＳＭは世界的な認知度の高さもあり、マレーシアのピアノ学習者の親の大多数はＡＢＲＳＭを受験すべきだと考えているという研究結果もある。

一方で、資格の取得が重視されるあまり、試験に関係する演奏技術の習得にピアノ教育が偏り、試験に含まれない創造性や自発性といった要素が重視されないことが問題ともされてきた。人前での演奏ではなく試験室という限定的な場面での技術の証明がピアノ学習の目的と化し、子どもの持つ才能を駄目にしているとか、まるでタイピストかのようにピアノが打鍵できるだけの子どもを生み出している、といった批判も見られる。

それに対して、音感やリズム感、豊かな音楽性などを身につけることを目標に「楽しく学ぶ」ことを重視する音楽教育の手法をマレーシアに持ち込んだのが、日本から進出してきたヤマハである。ヤマハは1966年のシンガポール進出以来、東南アジア展開を進めており、マレーシアでも音楽教室をマレー半島部西海岸およびボルネオ島の都市を中心に開校している。

日本のヤマハ音楽教室と同様のカリキュラムを用いた独自の教育システムは、当初の日本においてそうであったようにマレーシアの音楽教育にとっても革新的なものであり、たとえその目的が製造している楽器の販促という要素を兼ねるにせよ、マレーシアの音楽教育シーンを変化させたとして一定の評価がなされている。

ただし、そのヤマハにも「ヤマハグレード」という資格試験制度が存在していることには留意すべきだろう。日本のヤマハ音楽教室でも、ヤマハグレードの10～６級程度までは学習の流れの中で取得されることもあるが、さほど大きな位置付けを占めてはおらず、ヤマハでの講師採用に応募できる資格とされる５級以上となると、受験のハードルが大きく上がるため多くの生徒は受験することすらない。

一方、マレーシアのヤマハ音楽教室では、このグレード５級を取得するということがベンチマークとなっているようで、ある教室のスタッフの方によれば、ジュニア（小学生）コースに通う生徒のうち体感で７割ほどは５級取得を目指すコースまで進んでいくのだという。

音楽検定試験の認知度が低い日本に比べ、マレーシアではその認知度・重要度が格段に高いと言える。自らの技能を資格という形にして証明することが重視され、「楽しく学ぶ」ヤマハ音楽教室でさえもグレード取得が大きな目標とされる音楽・ピアノ教育の状況は、マレーシア社会の資格試験主義を反映しているかのようである。

＜筆者紹介＞
東京大学大学院総合文化研究科博士課程修了。博士（学術）。マレーシア社会研究を専門として、教育社会学の視点からのアプローチを試みてきた。筆者自身が幼少から音楽・ピアノを学んできたこともあり、最近、アジアにおけるピアノ関連産業についての新たな研究会の発足に関わっている。

Copyright(C) NNA All rights reserved. 記事の無断転載・複製・転送を禁じます